体 育 學 研 究

第 4 號

昭和 27 年 11 月

KATO, K., EBASHI, S., The Sociological Study on the
Influence of Sports for rural Communities. (2)

所謂「スポーツ村」の社會的性格

第 2 報 石川縣粟ノ保村の實態について

東京大学 加藤 橋 夫 江橋 慎 四 郎

第 1 報に於ては、村のスポーツ導入の契機や、背景發展の概略、スポーツ活動の現況について述べたのであるが、第 2 報においては更に村のレクリエーション活動の實際についてふれ、最後に粟ノ保村について調査した結果の総括を述べることにする。

9. 餘暇活動の實際

村民一般がスポーツ以外に如何なる余暇活動を行つているかをみると、第 1 表のようであり、男子では 31 才より 35 才までの者

が最も多く、同年令層のうち 66.7% の者が何等かの余暇活動を行つているのであり、この年令層に於ける顯著な割合を除くならば、15 才より 20 才までの 60% を頂点に年令の進むに従い、その割合は遞減しているのである。なお 50 才以下の者 379 名についてみるならば、218 名即ち 57% 約 6 割の者が、何等かの余暇活動を行つているのである。女子についてみてみるならば、15 才より 20 才迄の間の者に於て最も多く、53.2% の者が行つてお

第 1 表

性/年令		15~20	21~25	26~30	31~35	36~40	41~50	51~60	61~70	71~
男	調 査 人 員	104	77	47	48	43	75	72	38	35
	余暇活動を行つている者	62	39	25	32	21	39	30	8	7
	同 上 比 率	59.6	50.6	53.2	66.8	48.8	52.0	41.7	21.1	20.0
女	調 査 人 員	94	54	52	57	54	85	64	43	24
	余暇活動を行つている者	50	25	18	16	13	10	5	3	1
	同 上 比 率	53.2	46.3	34.6	28.1	24.1	11.8	7.8	7.0	4.2

り、これを頂点に年齢の進むに従つて遞減している。男子に比するならば、やはり行つてゐる者の割合は少いのであり、家事や農事との関係から比較的このような機会に恵まれぬことを示している。

更に行はれてゐる余暇活動の内容についてみてみると次表の通である。

男 子			女 子		
	人数	%		人数	%
読 書	68	25.5	読 書	51	38.1
将 棋	46	17.2	映 画	23	17.2
映 画	35	13.1	生 花	22	16.4
将 棋	35	13.1	手 藝	16	11.9
釣	17	6.4	音 樂	14	10.4
音 樂	17	6.4	その他	8	6.0
その他	47	17.3			

男・女子共に読書が最も多いが、各年齢層に於ける、顕著な活動はみることができない。スポーツ活動以外の余暇活動としては、以上の種目が本村で行はれてゐる主なものであり、特別の傾向はあらはれていないのである。

また、スポーツを含めての余暇活動全般について考察してみるならば、余暇活動を行つてゐるものが、各年齢層毎の総人数の何%を占めているかをみてみると、第2表のようになるのであり、それを図示すると第2図のようになるのである。これによれば、男子、女子ともに20才以下の者に於て最も多くの者

第 2 表

	男 子			女 子		
	調査 人員	実施 者	比率	調査 人員	実施 者	比率
15~20	104	85	81.7%	94	58	61%
21~26	77	53	68.8%	54	27	50%
25~30	47	30	63.8%	52	16	30%
31~35	48	36	75%	57	16	28%
36~40	43	23	55.8%	54	14	25.9%
41~50	75	41	54.7%	85	12	14%
51~60	72	30	41.7%	64	5	7.8%
61~	73	19	19%	67	6	8.9%

第 2 圖

が余暇活動を行つてゐるのであり、男子では81.7%を、女子では61%を示している。

更に男子では31才より35才までの間が多く75%の者がそのような機会を持つていることを示している。総じて男子に於ては50才以下の者の半数以上が何等かの余暇活動に親しんでいるのである。これに反し、女子に於ては、低年齢層においてその割合は相当高いのであるが、年齢の進むに従つて、その割合は遞減しているものであり、又半数以上の者が余暇活動を行つていような年齢層は、僅に25才以下においてであつて、25才以上になると余暇活動を行つてい者の割合は、急激に減少しているものである。このことは、家事、農事に時間を奪われてしまう農村婦女子の一般的傾向を示しているものであり、男子に比するならば、家庭婦人になると共に余暇活動の機会減少し、年齢の進むに従つてその割合は更に増加していることを示しているのである。

又、以上のような余暇活動を行つてい人々の家庭の経済状況についてみるために、各家庭の昭和24年度における村民税の納付額を一覧表にしてみると、次表の通になるのである。この表によつて明なように全村に於け

納付額	全戸数	男子	女子
600円以下	109	36	22
601～800円	132	75	36
801～1,000〃	58	80	34
1,001～1,200〃	39	81	30
1,200～	14	19	17
計	354	291	139
	(A)	(B)	(C)

る村民税納付額による各戸数の分布はA列のようである。800円以下の家庭が69.9%と約7割であるのに対して、余暇活動を行つてい者についてみるならば、男子では800円以上の税金を納付している家庭の者が52%、女子では58%と夫々半数以上をしめているのである。

このような点からしても、比較的農家収入の多い家庭の者が余暇活動を行う機会を持つていということを確認することができるのであ

る。

次に、スポーツ活動も行い、他に何等かの余暇活動をも行つてい者についてみると次表の通りであり、男子に於ては25才以下の

年 齢	性 別			
	男 子		女 子	
	人	%	人	%
20才以下	32	41.6	25	70.0
21～25	24	21.2	7	19.2
26～30	3	3.9	0	0
31～35	7	9.1	1	2.7
36～40	7	9.1	2	5.4
41～50	3	3.9	1	2.7
51～60	1	1.2	0	0
61才以上	0	0	0	0

者が、女子に於ては20才以下の者が圧倒的に多く、夫々62%、89%を占めている。このことは、本村ではやはり低年齢者の者に余暇が多く、従つて様々な種類の活動ができること、又更に男子は25才、女子は20才を大体の境として、余暇活動としては、スポーツよりも、それ以外の活動に段々と親しんでゆく傾向にあることを示すものであると云えるのである。

10. 総 括

本調査の目的として考えたところの2つの問題、すなわちスポーツを農村に受け入れるようになった原因の究明と、スポーツが普及したことによる社会的影響の摘出については、明確な要因を見出すことが困難であつた。既に述べたように、第一の問題については、原則としてはスポーツやレクリエーション活動が普及する基盤として考えられることは恐らく経済生活の向上と安定によつて余暇の生じたことに起因するものと思われるにも拘らず、その明確な時期を見出すことはできなかった。然し乍ら本村は既に明治時代より比較的余暇のある生活を営み、そのためか、相撲、力石、競走等が盛んに行われ、他村との試合においても常に優位を占めていたと言われている。従つて、スポーツ的な活動は既に遙か以前よ

り行われ、その起因の1つと考えられる経済生活の状況は既にある程度でき上つていたとみることができよう。

特に本村の特長とする籠球は既に述べたように昭和3年頃それに熱心な小学校教師の努力により小学校に導入され、対校試合に勝利を占めるに従い村民の関心を惹くようになったものであつて、当時特に目立つた経済生活の変化はないのでこれが籠球を盛んにした原因とは考えられないようである。したがつて、根本原因と考えられるものは、既に明治時代より村民のスポーツ好きの傾向のあるところへ、籠球に熱心な学校教師の指導が加わつて、籠球熱が次第に振興したと考えられるのである。

次ぎに終戦後籠球が盛んとなりバスケットボール村とさえ言われるようになった原因は、昭和の始め頃の小学生が成長しそれらが軍隊より帰還し、中心となつて始められるようになったことは既に述べた通りであるが、この基盤となつているものゝ一つとして考えられるのは、農地改革による富の均等化と農村の一時的な好景気が、村民のスポーツ活動に関心を持つ余蘊を生ぜしめたとみることができらう。したがつて最近における農村の不況は、村民に労働を多く強いる結果となり、近來次第に籠球が退潮し始めたと考えられることもできようが、それと同時に昭和24年の本村体育協会の設立、レクリエーション優良村としての表彰等によつて急速に多種目のスポーツをとり入れたことによるのであらう。

従つて以上のような事情は、ある意味ではバスケット村としての特性を維持してゆくことができるか、或いは多種目のスポーツを普及することによつてそのような特性が失われてゆくかの時期に当面しているとも云えるのである。

第二の問題として、スポーツが本村に与えた影響として、栗ノ保小学校発行による「栗

ノ保体育」では次のことをあげている。

A. 広く村民に与えているよい点

(1) 健康及び道徳的方面……体育の向上により、正義を愛し、友情に富み、青少年の不良化防止に偉大な影響を与えている。

(2) 文化的仕事能率の面……業務の余暇をさいて行ふ体育により、明朗快活となり、文化の向上、日常の業務の能率増進に好結果をおさめている。

B. 村内各種団体との連絡をとること

(1) 本村の会合は即ち村内の重要なポストを占める人々の集合になるので、公民館、生産研究会、婦人会、青年団、川柳文化協会、役場、農協との連絡を考えて企画される。

(2) 人的要素と行事面においては直ちに村行事と考えられることが多く、村民の重要メンバーの大半が出席するから、体育を通して、村各種団体、行政機関、教育機関、生産機関の横の連絡に好影響を及ぼしている。

C. レクリエーション運動の普及

(1) 業務の余暇をさいて行ふ体育である故、レクリエーションとしての体育え、自然的発展をしていつた。

(2) したがつて村民全体に明朗快活の気風が生じ、文化運動の隆盛へ招車をかける傾向が強くなつて來た。

(3) 体育・レクリエーションの実施により、生活の合理化がはかられ、「いつでも、どこでも、いつまでも」即ちレクリエーション運動の日常化、生活化の気風助長となり、あらゆる面に活気をおびてきた。

以上のような影響については、本調査では顯著なものを見出すことはできなかったが、若干これらに關係のある点について述べてみよう。

(4) 村民及び村当局のスポーツに対する関心、村民のスポーツに対する関心の調査については既に述べたところであるが、こゝでは主として関心のあらわれを経済面から触れて

みよう。本村民のスポーツに対する関心は我が国における他の諸農村よりも遙に高い度合を示している。したがって村民はスポーツに対するある程度の経済的支出をしている事実を見出し得るのである。

本村の体育協会の主要収入は会員の会費であり、年100円の会費を徴収しているのであるが、会員数は250人となつている。会員の主なる者は村の指導者階級と青年であるが、容易に会費を徴収し得るところにその理解の程度がうかがえよう。

部落対抗競技の練習や慰労会にはマングウ(寄附金)によつて金が集められる。これは主として富裕な階級に割当てられるが、部落によつては相当の額にのぼつてゐる。

競技会には、村内で行はれる場合でも、村外の場合でも応援にゆく者が比較的多い。特に金沢市で開かれる大会にさえ多数の者が旅費を払つて観戦にゆくことは、スポーツに対する関心の程度のあらわれの一つとみることができよう。

村当局のスポーツに対する財政的支出については、戦前においては予算として主として小学校経費の中に組み入れられていた。(昭和18年より20年までは別に社会体育費として、又厚生費として僅な金額が組まれている)。戦後においては昭和24年以降は公民館経費に組まれ、その中の一部が体育協会に補助(10,000円)されている。このことは本村が表彰されたことによつてあらはれた現象であつて、それ以前においては、体育に対する財政的支出は他村に比して決して高額とは言えないのである。しかしながら、最近においては漸次体育に対する村支出は多くなり、主として施設面に支出されるようになってきている。(例えば小学校運動場の拡張とその施設の充実等)

(ロ) スポーツと村民の意識 スポーツに対し村民がどのように考えているかということ

についての調査において約20%の者が村の融和によいと答えている。このことは、部落対抗の競技において部落意識を高め勝敗に抱泥することが全くみられないという事実より逆に証明することができよう。

更に年1回行われる村民運動会には村民あげて老若男女を問はず集合し、それらが争つて種々の運動種目に参加することは、村の融和に役立つところがあると云えよう。

終戦後活躍した30才台の籠球選手は現在殆んど選手活動は行わず、家の中心の働き手として家業にいきしんでいるのであるが、これらの人々の心の中に同志的結合意識がみられた。これらの選手達には家の貧富の差があるが、籠球を行う場合にはそれは全く問題とならないと答えている。元來北陸の農村、特にこの地方には階級性が極めて強いのである。終戦後の農地改革により大いに階級性は払拭されたが、未だ農村の中にも、又家の中にも階級性が残存している。村の中における親方・子方の制度、家の中における婦人の地位や、次男・三男の問題については老人の間には従来の考え方が残つてゐる。しかしながら中年層特に30才台の選手仲間に階級性が殆んどみられぬことは、一面スポーツからの影響とみることもできよう。けれどもこのような考え方は40才以上の村の中核たる指導者層や家の主人の地位にある者には、殆んどみることができないので、それが村民の意識の上に影響を与えていることはないのである。

村内や村外の体育行事に多くの村民が参加し、村内の地位や身分や貧富の差を忘れて行事に参加することが、多年に亘るならば、このことがやがて村民の意識に何等かの影響を与えるであらうことが推定できるのである。

(ハ) 本村の将来について、籠球は現在下り坂にあると云えよう。それは特殊の選手による偶然の勝利が一時的に村の籠球を盛んにしたに過ぎず、その結果村民の関心を惹いたの

であるから、現在の如くわが国の一般の籠球技術が進歩した場合到底曾ての如き成績はおさめ得ない状況にあり、結果として籠球が下り坂にあるのは当然である。しかしながら、本村の指導者の体育に対する方針が対外試合に重きをおかず、むしろ村内の行事にむけられているので、籠球は次第に村の青年層の多くに浸透しつつある。もつとも現在の如く僅か小学校の狭い体育館に設備が限られている限り、その普及性の限界は極めて狭いと云はざるを得ないのである。その上、体育協会の設立から多種目のスポーツが村に入つた結果、籠球という一つの特長あるものを失う傾向にさえある。更に小学校の体育方針は文部省の学習指導要領によつて多種目の運動を経験させることに重点がおかれているため、一層本村の特長である籠球の普及が伸び得ぬ状態にあると言えるのである。現在のような協会の設立に伴う多種目並存が果して従來のバスケット村と言はれたようなバスケット・ボール中心主義の時期と同じような影響を村に与え得るかという疑問をいだかせるのである。

本村はバスケット・ボール村として喧伝され村民の籠球に対する関心も極めて高い現状であり、この特長を生かすために、村の体育方針（籠球設備の拡充、部落広場の設置と籠球設備、籠球試合における参加者や方法の研究）の樹立と小学校の体育指導方針（籠球中心の体育指導計画、女子の籠球指導、学年別籠球施設の設置）の確立が必要と考えられるのである。本村もわが国農村の例にもれず、農作のための労働時間が多く必要である。村の青年の多くが遊ぶ時間の少いことを嘆じている。改良農村として種々の研究が行われ、農業の合理化が行はれつつあるが、労働の余暇が生じ得る程度にはなっていない。青年の大部分は勤労に熱心で極めてよく働くようである。然し村民の意識は、勤労と適当な遊びによつてよい生活をうみ出そうとするところまでにいつ

ていない。いわばゆとりのある生活意識ができあがっていないのである。したがつてスポーツが一時的には盛んになつても、それが長続きすることは容易ではないのである。スポーツ活動が真に農村生活の中に浸透するようになるには多くの人々がスポーツを実践することによつて得られてくるのである。本村のスポーツは比較的若いのであるから、このような意識が普及するには、なお相当の年月が必要であらう。

本村においては、次第に経済生活も確立しつつあり、又村民の生活態度に幾分レクリエーション活動を取り入れているようになっていいる現在、スポーツ活動を盛んにする素地はできているといえよう。スポーツに対する関心も籠球見物というところから、次第に実践に向いつつある。したがつて將來は村当局と村の指導者のスポーツに対する方針が村民の生活に対する意識に反映して、結果を見出すことができるようになると思われる。既に述べた「粟ノ保体育」にみられるようなスポーツの影響を実証し得る多くの材料を見出すことはできなかつたのであるが、このようなことが述べられている根本には、そのような傾向が見受けられると考えられるのであるし、又それが明確な形であらわれるためには、相当の年月が必要と思われるのである。

これを要するに本村のスポーツは、云はゞ現在転換期に到達しているというべく、又ある意味ではわが国における農村スポーツの一つの上の限界を示しているとも云えるのであり、生活の改善や農業技術の改良等の行われぬ限り、現状に止るか、或いは現状以下に後退するのではあるまいか。

（本研究は昭和26年度文部省科学研究費 課題番号12,620号——によるものであり、東京大学の重田教授、福武助教授の協力、指導を得たものであることを附記する）